

# 洛友會會報

京都市左京区吉田本町  
京都大学工学部  
電気工学科教室内  
洛友會

## 十一月随想

京都大学名誉教授・工博  
大正六年卒業 松田長三郎

○ 鳥養先生の御榮譽。十一月三日文化の日に、恒例の秋の叙勲が発表された。本会会長鳥養先生は勲一等旭日桐花大綬章をお受けになったが、何ともお目出たい限りである。承れば、勲一等瑞宝章をお受けになったのは、丁度十年前であられた由。長寿と、皆さんのおかげと喜んでおられた。お脚が少し弱わられたが、洛北に悠々閑居の御生活で、やはり大学の問題については心配しておられ、私も及ばずながら教室の教官達を激励している旨申し上げた次第であった。十一月末には、京都新聞掲載の先生の筆になる約100篇の時々随想が刊行される予定であるし、又同様京都新聞掲載の大学総長大いに語るとして随筆集が鹿島建設から発行せられ、この廿八日にはその記念会が催されることになつてゐる。先生は今、八十七才一層御加餐、御健康に御注意の

上、御長寿を保たれんことをお祈りする次第です。

なお本会会員で、今回叙勲の榮譽を受けられた方々は、勲一等瑞宝章をお受けになった阪急社長森薫氏（昭和3年卒）初め勲二等の難波捷吾（昭和2年卒）および竹上武雄（昭和4年卒）勲三等の藤本勲（昭和4年卒）の諸氏でありました。謹んでみなさんの御榮譽を讃え御健康をお祈り致します。（遺漏がありましたら何卒おゆるし下さい。）

○ 今年の夏以来、友人故旧の不幸が相次いでおこり、大変憂鬱な時季でありました。前号には阪口教授の訃を悼み、今また岡本名誉教授と近藤工学部長令夫人の訃を記さねばならぬことは悲しい限りであります。謹んで御冥福をお祈りする次第であります。かつて教室で3回許り不幸が続いたことがありましたが、当時の習慣から、

青柳先生の発起で神官を招いてお祈りをしてもらつたことがありますが、これからは、こういうことのないように、（他に工学部で二人の現職教授の逝去がありました）呉々も健康に御注意をお願いしたいものです。

○ 岡本先生のことども。岡本先生は、大正元年、第一高等学校を経て電気工学科に入学されましたが、その明晰な頭脳は、諸先生の信望を得ておられ、特に電気磁気学、数学に秀でておられ、このことはわれわれ下級生にも伝聞されていきました。大正四年、ご卒業後は、特に選ばれて、数学研究のため理学部数学教室に派遣されました。後、電気機器の講座を担当されましたが、更に青柳栄司先生のおすすぬにより、当時我国において漸やく関心を払われて来るようになって来た熔接の研究を初められ、多数の論文を発表して黎明期における斯界の先覚者・指導者として、熔接学界・業界の、今日の隆盛の基礎を築かれた偉大な御功績は没すべからざるものがあると思ひます。（当時、大容量水銀整流器に関心を持っていた私は、その鉄槽容器の熔接をお願いしたことがありましたが、快よく熔接してもらつたことがある。）この点に就ては御葬儀の節、現在熔接界の大御所である岡田実大阪大学前

総長も、先生のご功績を讃え、最高の讃辭を贈つておられました。昭和23年8月、京都大学を定年御退官後は、請われて、兵庫県立中央工業試験所長、姫路工業大学長として、更に研究と教育に尽瘁されました。姫路工大に就ては、その前学長が私の旧友であり、又岸田幸雄知事などの依頼もあつて私は先生の御出馬をお願いしたことも、思い出であります、そんな関係で、県の大学以下の学事行政が孫のような勞務課長の支配している状態を、立派な学長を迎えるためには、知事直屬にすべきであると、同知事に進言したことがありました。（当時正路倫之助京大名譽教授も兵庫県立医科大学長でありました）。姫路への往復の列車内で読書、殊にトルストイ初めロシア文学を楽しんでいられると話をしておられました。昭和33年御退職後は、悠々自適の生活を送られ私共がやっている書画の会（又楽会）に進んで入会せられて、非常に喜んでおられました。昭和49年10月12日、八十六才を一期として惜しくも御長逝になりました。茲に偉大なる御功績と御清風を偲び敬慕哀悼の意を捧げ御冥福と御遺族の御多幸をお祈りする次第であります。

○ 今我が国は戦後最大の深刻な経済危期に見舞われています。政治

家も経済学者も、先きの見通しはつかぬと云つています。インフレ物価高、金融引き締め、総需要抑制など、いろいろの悪条件が重なりあつて、また政府の物価安定策の失政から、今日の経済の不安の混乱状態を招いたことと思はれます。これは何も我が国だけではなく、破産寸前と云はれるイタリヤ初め英・仏・西独、更には米国までも同様であります。一九三三年でしたか、ヨーロッパから帰りがけに米国に立ち寄りしましたが、不況のどん底で、G・Eやウエスチングハウスなどの大メーカーも、半分位しか操業しておらず、多数の失業者を抱えていました。ルーズベルトのニュー・ディール政策で、漸くその苦境を脱したが、今回はそれに次ぐ大危期であると言はれています。その前一九六二年十月、所謂キューバ危期の時も米国内は大変な緊張期でありましたが、この時も偶々、世界巡遊の帰途、英国からニューヨークに着いた途端、そんなことで、危期の過ぎた最初の日曜日には、先づ命があつて良かったと、人々は挨拶し合つたと伝えられていました。今回の危期も非常に深刻で長期的と予想されていますが、我々たちがって簡単に首切りが行はれる、退職金や年金が無いといふこととで（この点少し、はつきりしま

済危期に見舞われています。政治

せんが)一般市民は、インフレ、物価高で職を失ったら、家族を抱えてどうしてやって行こうかと、不安におののいていると、伝えられていました。我国は困る困ると云っても、今迄は、何とかやって行けたが、もうこうなつては、体裁を構つてはいらなくなり、名だたる大会社でも、退職希望者を募り、一時帰休を励行し、新規採用を停止或は縮少するなど、就職戦線には相当の影響を与えているようです。この危期を脱出するには如何すればよいか。これには、為政者、会社経営者の頭の痛い所であるが、今こそ、そういう人達の経綸を揮うチャンスであると思はれる。最近、英国、ボストンのコンサルタント・グループに依頼して、将来の見通しについて調査した所によると、一九八〇年代には、日本は、世界一快適な豊かな住み良い国になる、最高の労働賃金を得、年10%の高成長をする、世界的な投資、原材、食糧の輸入確保ができると、歯の浮くような見通しをしてきていますが、喜ぶべきか、悲しむべきか。かつて京都にも来たハーマン・カーンが21世紀は日本の世紀であると、日本国民を喜ばせたことがあるが、そんなおだてに軽々しく動じる日本人ではないが少くとも、客観的にさういふ予想が現はれているこ

とは、日本人として悪い気持ちがないし、一層自信を高めて、一人一人がそのベストを尽くすようにすれば、前記二氏の予想も、その外れにはなるまいと樂觀したい。時恰かもフォード米大統領の来日を迎へ、大変なことではあるが、更には、韓国、ウラジオストックでの米ソ首脳会談など、中国初めアジアを巡る諸勢が一層きん迫してくるようになり、素人ながら考

### いわき市のあれこれ

福島工業高専教授  
昭和十四年卒  
内藤 正義

私は三十数年間を電力会社で過ごし、定年退職後福島工業高専専門学校に勤めております。当校は創立以来十二年余り経過致しまして、基礎づくりも終り、次の発展に向つて全員力を合せて努力しております。

私は仕事の暇をみつけて、学生諸君と気楽に話をしながら元気に日日を過しておる間に五年がすぎこの市にたいへん親しみを感ずるようになつて参りました。そこでこのいわき市のあれこれについて書くことにいたします。

まず市の概要についてのべます。当市は、昭和四十一年十月、五市四町五ヶ村大同合併して誕生し、大平洋岸においては東北最南

えられる。国内的にも田中総理の金脈問題で、政局今後の成り行きが心配せられる。何はともあれ、教育・研究の問題は、国家百年の大計であるから、こういう方面に政府も政党も、もっと真剣に取り組んでほしいものである。

さて来年は、どういう年になるでありませんか。皆さんの御多幸な迎春をお祈りして筆を擱きます。(終)

端に位し、北側は日本一の原子力発電基地への建設が進んでいる、双葉・相馬地区に接しており、面積は神奈川県約半分あり全国第一位です。

当市は広い農村を背景として、農業・畜産・水産加工を主体に食料品生産業は古くから行われておりましたが、明治三十年頃より、石炭に大きく依存する市として栄えて参りました。そして昭和三十九年常磐・郡山地区の新産都市指定に伴い、各種企業が進出して参り、臨海地域は勿来地区・磐城地区にも活況を与え、人口も多くなりました。

とところが石炭から石油への転換によるいわゆるエネルギー革命は

石炭産業の斜陽化に拍車をかけ、合理化政策の推進も及ばず、中小炭鉱は潰滅しましたが、大手炭鉱は経営の多角化によつて活路を求め、常磐炭鉱では、多くの系列会社を設立して経営の維持に努めたが、四十六年四月閉山が行なわれ、多くの離職者を出し、大きな社会問題となりました。しかし産業の開発によつて、当市は著しく発展して参りましたが、自然や文化財が破壊されはじめ、公害問題も発生しており、最近強い関心が払われております。

次に文化財の面から見ますと、当地域は気候地形に恵れ、旧石器時代から人間が住んでおつたことが、出土品などから認められており、数多くの文化財がみつけれられております。代表的な貝塚・古墳・建物には次のようなものがあります。

古墳には中田裝飾横穴がありま

す。これは昭和四十四年県道工事中、山を切り崩した時に発見されたもので、奥の壁には三角形を連ねた線刻に、白と朱の彩色壁画があります。横穴の内部と前庭部から、装身具・武器・馬具・武器・鏡・土師器・須恵器等多くの遺物が発見されました。裝飾古墳は本州では数ヶ所わかっているにすぎないので貴重なものとされ、保存のための工事完了しております。

次に国指定文化財としては白水阿弥陀堂があります。これは永曆元年国主岩城則道の奥方、徳尼の建立になると伝えられております。平安時代後期に流行した浄土式庭園をもつた阿弥陀堂建築の代表的なもので、和棟建築の特色をよく保存しております。明治三十五年に国宝に指定され、堂内の五仏像も重要文化財に指定されております。

つづいて自然観光の面から見ますと、海岸及び山岳地帯に景勝の地多く見られます。

海岸地帯は県立公園に指定されており、海食を受けて出来た海岸や岩礁がならび、一部には砂浜が発達して地形の変化に富んでおります。この地帯は東北地方ではもっとも気候温暖の地で海水浴に適する場所も多く、海の汚染もあまり進んでおりませんので、海水浴磯遊びなどの行楽に関東方面から

も年々多くの方々が見えるようになりまし。又この公園の南端には勿来の関跡があります。同所は海の見える丘陵にあり、松林の中には山ザクラが多い景勝の地であります。最近茨城県との提携による常磐ブルーラインのPR効果が上がって、行楽客の訪れも目立っております。又山岳方面における景勝の地として有名な夏井川渓谷県立公園があります。

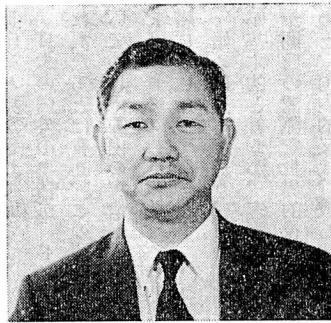
阿武隈山地から流れ出る夏井川は磐越東線川前駅から小川郷に至る間で峡谷を刻み、車窓からもその溪谷美を楽しむことが出来まし。ここは新期の花崗岩または花崗閃緑岩からなり、岩盤が硬いので滝や急流が数多く残っております。江田駅附近で北方から夏井川に注ぐ江田川筋には青戸戯廊があります。こども名の通りいろいろな形の滝や瀬が相次いで並び、岩がそそり立って、奇観を呈しております、秋の紅葉時にはことに見ものであります。水石山の山頂には広い隆起準平原遺物があり、その平坦面は草でおおわれ、放牧場やゴルフ場として利用されております。

又観光施設として当市を代表するハワイアンセンターは常磐炭鉱が石炭の需要低下による企業転換を迫られた時巨費を投じて建設され昭和四十年一月にオープンした

ものであります。ここは毎分一〇トンの温泉を利用した種々の娯楽施設が整っており、六〇〇種の熱帯植物群が見られます。入場者年間約二〇〇万人で当市の観光を一変させました。

## ドイツ旅行の印象

高津製作所五条工場長 森 島 省 三  
昭和二十五年 卒



先日、社用にて約二週間のドイツ旅行をこころみ、八月二十三日帰国しました。多くの方々がドイツに旅行しておられ、ドイツについて、豊富な情報を得ておられる事と存じますが、私の今回のドイツの印象が最新と思えますので、皆様にご報告致します。

出張期間が約二週間という短期間であり、かつ旅行した所がフランクフルト、ケルンという限られた所であり、接触したドイツ人も特定の人達でありますので、私の

以上色々のべましたが、多くの文化財があり又立派な自然も沢山残って居りますので、調和の良くとれた産業開発が進められ、益々繁栄することを期待されております。

印象が、ドイツ全体の状況を正確に伝えるものではないと、思いますが、この点を考えに入れて、私の報告をお聞き下されれば幸いです。

昨年、中頃以来の日本経済の異常な動きの渦中にある、一人の日本人として、私はドイツ人は如何に考え、如何に行動しているかを知りたく、興味をもって今回旅行しました。以下、順序不同ですがドイツの印象を述べます。

一、ドイツ人は、日本の現在の経済状況を狂的であると考えている。

私が会いました数人のドイツの企業管理者は、いづれも日本の今年の春斗で賃上げが三〇%以上あり、この一年間の物価が二〇%上昇した事について、理解が出来ない様であります。彼等はこの状況を狂的(クレージ又はデブル)という表現をしていましたが、日

本経済が輸出で成立していると言う認識で考えると、日本国内の物昇、賃上げ等の異常な高騰は、日本経済の輸出力を低下させ、これが原因となり日本経済が根底からくつがえるのではないかと、しかるに上述の物昇、賃上げは、明らかに狂的という表現通りであります。

日本の中にいる、我々日本人よりも、彼等は外部にいて客観的に日本経済の根本的な弱点を、正確に握んでいるのかも知れないと、思いました。

私の接触したドイツ人は、いづれも日本経済の将来を心配しています。

二、ドイツの企業は、世界市場を相手にして商売している。

ドイツの企業は、立地条件、人種問題その他色々の点で世界中の国との取り引きが、日本より容易である為でもあるが、常に自国のみならず世界の需要を考え、(生産園諸国も含めて)商品を開発し商売している様に思える。

世界市場を相手にしている為、特定の国の経済が低下しても、ドイツ企業は大きな傷手を受けない。又、ドイツ企業は、一国の経済改善に留意するよりも、世界の需要全体が増大する方向に留意し、政策を進めている様に思われます。唯、企業形体は米国方式と

異なっていると思はれます。乃ち他国に製造会社を、どしどし設立し、資本と技術を管理している米国流の世界企業体をとらないで、先づ製造体制は自国におき、販売政策のみ世界企業体制を採用しています。これは、インフレの進行度合、労働力確保の難易度等の点で、米国と西独とで差異がある為であると思えます。

西独の生産体制の一つの特色は仕事について夫々の仕事の専攻さを、今でも保ち、所によっては世襲の考え方が残っているヨーロッパ工業の名残を受けて、労働者が夫々、自己の仕事に誇りを持ち夫々の作業に、労使合意の上、標準作業時間制度を採用している事であろう。

この標準作業時間システムは、流れ作業体制、自動加工機械による無人生産体制と共に、秀れた生産システムであると思えます。

三、ドイツの企業人は、国の利益を優先させている。

これは、日本企業でも同様ですが、ドイツの方が、日本より強く感じられます。西独の企業経営者には、職を変更している人が多く。これは、ドライに言えば、各人の力量が買はれて、会社を変更しているのであるが、この様に企業経営者がドイツの会社間で、転職すると、ドイツの各企業の企業



活動力が平均的に向上し、この事が西独産業の向上に有用であるとの見方をしていた。

アメリカに似ているが、ドイツ流と言う国中心の考えがよく出ていると思う。又、航空会社の関係者でない企業人が、ルフトハンザ航空を誇りに思い、自慢し、その利用をすすめる度合が、我が国より強く感じられます。

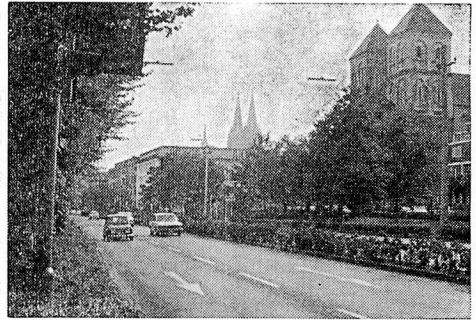
四、ドイツ人の仕事振りは、Slow But Steady である。

第二次世界大戦後三〇年も経過しているのに、戦時中に破壊された建物で、復旧されず未だにそのままの建物がケルン市に多く見られた。理由を聞くと、破壊される前と、同一の形状に再現する様、作業中であり、今後約三〇年位、修復に要するとの回答が返ってきた。日本の戦後のあり方に比較して、ドイツ人気質がうかがわれ興味深く感じました。

企業の決裁振りにも、日本とドイツでは差がある様です。日本企業では、充分時間をかけて調査研究を行い、決裁がおろるのが一般的に遅いが、一旦決裁が出ると、その計画の執行は早い速度で実行されるのが、普通である。ドイツでは、これと異り決裁は早く出るので、その執行は Slow But Steady との事です。

業の将来を重要視している。エネルギーとして、石炭、石油水力の改良開発に意を用いるだけでなく、原子力エネルギーの開発活用にも、ドイツ全体が積極的に取り組んでいる様に思われます。エネルギーの開発、増大が人類の将来の幸福につながる事であるのは、誰でもが考えている事です。この論理の上に立って、ドイツでは、原子力エネルギーの研究開発、製造、販売に注力しており、現在ではエネルギー産業は成長産業と見なされています。日本の内外の事情が、ドイツとは異なるとは言え、この問題についての日本国内の実情が、あまりにも異なるのは、反省すべき事と感じました。

始めに述べた通り、日独両国民が基本的と言うか、客観的と言うか問題の認識を世界的視野で見ると、国内的又は、或る特定グループ丈の視野で見るとの違いが、このエネルギー問題にも、明白にあらはれていると思えます。六、ローマ、ドイツ博物館を見今年三月初旬、ケルン市のドーム近くにローマ、ドイツ博物館が開館した。約二千年前のローマ時代の遺跡が発掘され、当時の美術品、像、建築物等が、この博物館に展示してあった。



富山の冬

北陸電機製造(株)取締役 昭和十三年 卒 早 東 嘉 夫

富山平野の東にそそり立っている北アルプスの雄、立山には例年九月下旬から十月の下旬にかけて初雪が降る。秋の澄み切った空に浮かんだ雪をかむった山は気高くきれいだ。夏の涼を求め、秋の紅葉を楽しむ沢山の観光客で賑わった山も、初雪の降る頃には漸く人も少なくなる。その頃の富山は秋も甜は、気温も二十度余、空気も爽やかな気持ちの良い日が続き彼方此方で運動会やらお祭で賑やかなる。十一月に入ると漸く気温も下がり凄げ易く、野良では秋の取り入れも盛りを過ぎ、木の葉も紅葉しそのうち落葉し始める。秋も終りに近づき肌寒い日が続く、山の雪は峯から麓へと徐々に下がつて来る。十一月の終り頃は気温も十度余に下がり、富山平野にも、みぞれ、あられが降り始め、十二月の初旬になるといよいよ初雪となり冬の日が始まる。それでも十二月中は降ったり消えたりして根雪になることはない。一月の初めには気温も五度余に下がりこれから三月下旬まで愈々雪の季節になる。夜分物静かに降ったり、強い季節風のものに中吹雪いたりする日は一冬に六十日余もありこの内十五日は十種以上も降る。また一ヶ月のうち雪の晴れる日は、十九日の雪日数に対し、七日しかないので一度降った雪は融けず四・五十日も根雪となり、最も積雪の多かった時は戦後では三十八年一月の豪雪時で、この時は彼方此方で大雪害があり、富山もまたひどかった。一月十六日から日に二十種、三十種と十日余も降り続いた。そんな時の晴れ間に真青な空を背景に真白な雪をいただいた立山は、昨年見たスイスのユングフラウと同じ位雄大であり美しい。その毅然とした姿は人々に一層の勇気を与えてくれる。雪の降った朝は家の前の雪よけから始まる。五種十種の時はさほど苦労もないが、一晩に二十種余も降ると一寸大変だ。また屋根の雪も一米にもなると戸障子が動き憎くなるので雪の晴れ間を見て雪降しが始まる。尤もこんなことは一冬にないこともあり、あっても一、二回である。急に沢山降った時は交通が渋滞する。先の三八・一の豪雪の時は交通機関が二、三日絶絶し富山は

陸の孤島となった。漸く動いてもノロノロ運転なので日常生活は勿論産業活動にも重大な支障を生じた。この時の苦悩を契機に道路の除雪・融雪対策が急速に進められ、昨今では五糎余も降ると朝早く未だ交通が繁しくならない前に、除雪車が幹線道路を通る。沢山降る日は二回も走り、除けられた雪は道の両側に溜っているの道巾は少し狭くなってはいるが、交通途絶は勿論ノロノロ運転も殆んどなくなった。また主要道路の一部や交叉点に電熱利用の融雪や、地下水利用の消雪が行われ、雪による交通障害はますます少なくなっている。屋根雪の除雪は道路の様に進んでいなく、トタンの下に電熱線を入れて融雪したり、屋根の上に水を流して消雪したりする方法が研究されている。

雪の世界は美しい。チラチラ降る雪や吹雪に霞む風景はあたかも濃淡のあるカスリ模様を見る様で、日常見なれた風景と異なった美しさがある。頭からスッポリ雪で包まれたいろんな種類の木、フソワリと雪で覆われた色とりどりの屋根、雪をかぶった雑草の生い繁った空地・田畑など白一色の世界が陽の光の中で銀色に照り輝く美しさは他の季節では味えない。毎年冬にする庭木の雪囲いも美しい。高い木、低い木、巾の広

い木など夫々に応じたしかも種々趣向を凝らした雪囲いは雪の中に見えるのも美しいが、それだけ見ても又美しい。

雪山は夏の一般人と入れ替って山岳パーティーの世界となる。登山口の駅は重裝備をして自然の厳しさに挑み体力を練る若い人で賑わっている。またスキー場では全国各地から来た若いスキーヤーで一杯になりゲレンデは赤・青・黄などが入り乱れて美しい。

こうして一月と二月は雪の中で生活しているが、早い時は二月の

### 赤毛布雑感

九州電力勤務 石原賢司  
三十三年卒

「洛友会報」の貴重な紙面の一部を、わたくしの悪文で、うめるのは、真にもったいなくも、恥かしい次第です。それも、約一年前の「欧米かけあるき」を出すのは我ながら少々抵抗を感じています。先輩諸兄から「今更何をそんなわかり切ったことを」といわれそうな、赤毛布の雑感を二・三述べて、ご免をこうむります。次元の低い話をお心広くご覧いただけます、幸いです。

なお、研修と称し一カ月でかけめぐった主な国は、英独仏米と

終り遅くとも三月の中旬になると春一番が来る。暖かい南風が一日富山平野を吹き抜けると雪は一度に融け、河川は急に水嵩を増し、今まで雪の下に埋まっていた野草が顔を出し、久しく見なかった土が見えて来る。今までの雪の白とドンヨリした空の世界から、色と光の満ち溢れた世界に変わる。冬は終わりのよいよ春が来た。

これから山の春は麓から峯へとゆっくり六月中旬までかかって這上って行く。

が必要になる。欧米には、数カ国語が話せる国際人が多いとはいえないドイツには、ドイツ語しか通じない人、フランスには、フランス語しか通じない人が、多いのも、事実である。こうなると、その国の人達の考えをつきつめたと思っても、日頃の不勉強がたたり、隔靴搔痒の感のみが強くなるのは、やむをえない。美人と語る楽しみを、などとは、いわぬまでも、街の人とも全々接触せずに、その国を去る、孤独な日本人にならないために、心臓の鍛練に加え、言葉の勉強が心要である。蛇足ながらその国の歌、音楽も大変役に立つ。ドイツのライン川を汽車で上った時のこと、同席の婆さん連に「ローレライの岩はどこか」と、すばらしい発音で尋ねたと、想像されよ。三回云っても、相手は、怪訝な顔のみ。そこで、「ローレライ」の歌を美声で聞かせたところ、連中はすぐ理解し、その場に合せた時は、声をそろえて、歌ってくれた次第である。

二、自然の美しさについて  
欧米の自然は、人工美も多いとはいえず、実にうらやましい限りの素晴らしさである。国の広さの大小とか、人口の多少といった問題は、どうにもならぬ。しかし、この自然を大切にしている有様は、わが愛する日本も、大いに反省し

見習う必要がある。これは、例えば唯公園、道路、我家に樹を植えようとかいった、ままたごのような美化、緑化運動では駄目である。どなたさんの言ではないが国土の有効利用について、根本的に考え直し、自然との調和に金をもっと使う必要がある。

カラーテレビの色が良いなどと云っている美意識を、自然色の方が、はるかに良いんだ、という考え方に転換できる環境を、早くとりもどしたいものである。

三、宝の山の赤毛布について  
たとえば、収集美術品の総数が二十万点を越すといわれる、パリのルーブル美術館に、とび込んだ赤毛布を、想像されたい。美術の山を、二・三時間で見ようとの意気込みは買えようが、その量と広さに圧倒され、鑑賞の点では、全くお手あげの状態となる。あげくのはては、ミロのビーナスはどこだ、ダビンチのモナリザはどこだと、ただかけずりまわる破目となる。

これが、ロンドンの大英博物館に入ると、猫に小判、豚に真珠的な様相を、ますます、呈してくる。古代オリエントの、古代エジプトの文化遺産であるといってもわが大脳皮質のいずこにも残っていない記憶力では、見るのではなく、唯眺めるのみに終るのは、淋

しい限りである。  
これは何も美術館、博物館だけでなく、すべての風物に対して、いえることである。

日頃、冗談に、教養が邪魔すると、言っていた教養のかけらと、どたばたしない心の余裕が、欲しいと、痛感した。

四、黒っぽい服装について

「他国の会社のおえら方を訪問するのだから、ダークスーツに、ワイシャツが無難でよからう」との、先輩のご意見に従い、典型的日本サラリーマンの、いわゆる、どぶねずみスタイルで、出かけた。逆に言えば、ここに日本人ありの服装といえよう。アメリカは大体、予想していた通りだったとはいえ、ヨーロッパの人達も皆、派手ではないが、仲々の色彩豊かな服装であるのを、始めて知る有様であった。異国に出るときは、われわれも、チンドン屋風になる必要はさらさらないが、少なくとも、どぶねずみスタイルとは、お別れた方がよいようである。

五、海外で出合う日本人について

エコノミック、アニマルとかの悪評をうけながらも、日本の経済力の発展が、もたらしたものの、ひとつに、日本人の海外旅行ブームがある。確かに、農協さんらしき団体客、ヒッピー風若者等、各

所の観光地で、日本人にあう機会が多い。しかしこれは、閉鎖社会の日本人の多くが、世界の一端を知る機会が増えたことであり、大変よろこばしい現象である。

ただ、ひとつ気になるのは、街角で日本人どうしが、合った時、いかにも相手を無視するが如く、挨拶もせず、そっぽを向く人が、多いことである。俺は、私は、あいつらとは違うんだぞとの意識があるのか、恥ずかしがりやなのかこの点いささか、ただけぬ風景である。

ハイジャック事件などを起す人物は、別としても、「日本のカメラは、高く売れると聞いてきた。あそこ金の髪女性に、これを買うように交渉してくれ」との、おぼさんに遭遇しようとは、夢にも思わざりきであった。  
六、年配の女性のかいがいしく働くことについて

レストラン、酒場等、真にせまい範囲しか知らぬとはいえ、このようなところでは、うら若き女性に、とんと、お目にかかる機会がない。これに代って、四、五十歳以上でもあるうか、年配の女性の働きぶりが、いやに目についた。まさに、こまねずみの如く、大女が、皿を、ジョッキを運び、文字通り走りまわっているさまは、あ種の爽快さを、おぼえた。料理

ローマの宵

中部電力(株)原子力室 坂 入 武 彦  
昭和三十三年卒

のうまい、まずは別として、このような姿を見ると、チップもは

ずもうかとの、気にもなるうというものである。

二度目にローマを訪れたとき、同行の友と語らってテレビの泉にほど近いキャプテラス風のレストランで夕食をとることにした。

一 マッサージがたむろする場所のようであった。

キャプテラス風といったのは、たしかに店の外に椅子やテーブルが出してあってそこで食事をするのだが、別に車のお通りに面しているわけではなく、雑然と建物がいっつか集まったうえにそれを包むようにして大きなアーケードがあり、いわば屋根つき広場の片隅に陣取る形になっているからである。下は石だたみで椅子の坐りは悪いが、いろんな人がそばを通ってゆくので居ながらにしていろんな見物ができる。同じアーケードの下ですこし離れたところには簡単な舞台がしつらえてあってアコーディオンやバイオリンを持った連中が入れかわり立ちかわりあがっては数曲のうたを奏し、見物人の間をまわって小銭を集めてゆく。まことに雑多であるが飾り気のない家庭的な雰囲気である。

さて一隅に腰をおろして夕食にとりかかった。いうまでもなくヨーロッパの食事は(とくに夕食は)まことに悠然たるもので、食前の酒にはじまって、前菜・スープ・野菜・魚に肉・デザートからコーヒールにいたるまで三時間もかかることは珍しくない。(イタリ

アでは更にスパゲッティがつく)外国の風俗習慣への厭厭の早いはわれわれ日本人の犠牲のようであられわれもすっかりヨーロッパ・ベースになってのんびりペースではじめた。まずビールで乾杯。オードブルが出、スープが出ていよいよ宴のはじまりである。

とこころで席についたときからレストランに隣り合っつて小さな店のあるのが眼に入っていた。日本流にいえば間口一間ぐらいいのかわい

い店で、たばこに絵はがき、それにちよつとした日用品や土産物などをひっそりと並べている。私の席はちょうどその店をななめ前に見据える位置にあるので店がよく

見えるのだが、けばけばしい看板もなければ特に客の目をひこうとするような飾り付けもない。なんとなく、自分の領分をわきまえているといった感じの店である。

店の奥には四十をすこし過ぎたかと思われる中年の婦人がひとりで所在なげに店番をしている。ボンヤリ眺めていてオヤツと思つたのは、その婦人がちよつと人目をひくほどの美人なのだ。身体の線はさすがに若くはないが、すこしやせ型で鼻筋がとおり、黒い目がいかにも魅力的である。お客のあ

る時以外はほとんど下を向いているのは編物でもしているのだからか、それとも膝のうえに雑誌でもおいているのだからか。何の変哲もないといえはそれまでだが、中年女性といえはやたらにブヨブヨ太って、それでいて何事もうやうやしく奉らないと御機嫌が悪いようなななめばかりを、つい二三日まえにイギリスで見てウンザリして来たところだったので、やせが

たの美人が店の奥にひっそりと坐っている図がなんだかとても嬉しく、心の中でしきりに賞め言葉をつくっていた。

暖い春の宵のこととしてそぞろ歩きをする人も多く、店へ入るひともしらほらあって、結構いい商売になつていようであった。お客のない時は相変わらず黙々と下を向

いて手を動かしているばかりで、お客が品物をえらんで自分の前へ持って来たときだけわずかに眼と口をほころばせるのみである。それでいて決して不愛想というのではない。余計なことをするとかえって客の邪魔になるから黙っていませんといった雰囲気、客の方も満足気に買物をしては店を出てゆく。

われわれのテーブルには魚料理が出され、その日仕事のあとでみやげ物を買に出たときの話がにぎやかに話まわっていた。なんでも、みやげ物店へ行って手袋を一組買いたいがと話しかけたら、げんなりしたで「日本人で手袋を一組しか買わないようなのはおまえがはじめてだ」と云われたのだそだ。とにかく日本人のおみやげ熱は大変なもので、すくなくとも五組ぐらいいは買ってゆくらしい。またある人は別に何を買おうというあてもなしにブラリと店に入るところ、日本人と見るなり、シニョリタが五、六人ワツと寄って来てカタコトの日本語で「手袋十組買え」式のセールスをおっぱじめたというのである。もちろんそれもこれも原因はすべて観光客のほうにあるのだが、それにしてもその商魂にはおどろかされる。とみんな喚いたり笑ったりの大さわがしで、食事のにぎやかさ

もすっかりイタリア風になって来た。

そのころ、くだんの店にはちょっとした訪問者があつた。こざっぱりとしたみなりの老婦人が中年の太った陽気そうな男と連れだつて訪れて来たのである。店番の婦人は遠くから二人の姿を認めるやこの時ばかりはいそいそと身のまわりをかたづけ店の外へ小ばしりに姿をあらわし、二人とかわるがわる固く抱きあつては頬ずりをした。そしてうれしげに早口でしゃべるさまが遠くからもよくうかがわれた。通りすがりの我々にはもちろんその三人がどんな関係にあるのかは知る由もなかったが、単なる知人というより血のつながった親類がひさしぶりに顔を見に来たといった様子であつた。ただ店を預っている身であれば店をあけてでかけるわけにもゆかず、ほんのしばらく店の前で立ち話をしただけで二人は立ち去つた。いつまでもふりかえっては手をあげて去つてゆく二人を送る婦人の目が心なしかうらんで見えた。

こちらはいよいよ肉が出て来た。ただし我々の悲しき胃袋はもう限界に近く、半分ぐらい片づけるところで小休止。ボーイがヒマだと見えて、ローマの案内をしてやるから地図をだせ、という。前日に駅で買った地図を出すと懸

命に説明をしてくれる。もつとも先方の知っている英語はほんのカタコトだし、こっちのイタリア語といえは音楽用語だけなので意志の疎通ははなはだあやしいものだが、このストリートは、モルト・エキスベンシブ・ストリートだ(売っている物がみんな高い)とか、イタリア・コンメ、ジャポネ(イタリアと日本はよく似ている)といった具合でなんとかわかるのは不思議である。

観光案内が一段落したところで、ふと、ローマへ来て絵葉書と切手をまだ買ってないことを思い出した。そうだ、あの店に行つてみよう。隣席の友にさそいをかけ、二人で席を立てて店に近づく。外国人が来ることもよくあるとみえて、くだんの婦人は別にふしぎそなうな顔もしない。絵葉書を十枚ばかり選んでカウスターへ持ってゆく。ところが、「これを買いたい」と英語で話しかけると大いそぎでメモに何か書きはじめた。見ると、絵葉書の値段がすこしづつちがうので、何リラの何枚という内訳を書いてるのである。書き終つてそれをこちらのほうへ廻してよこし、「ね？」といったようにわずかにほほえんだ。どうやらイタリア語以外はできないらしく、金を払うと、「グラッチェ」と、こんどはうれしそうな笑

いをこぼした。切手も買ったかたが売っていないようだったの席へ戻る。しばらく席を離れている間に皿が下げられ、デザートの果物がテーブルのまん中に盛られていた。

もうそろそろ9時である。ホテルに残して来た仕事のことをすこし気になりはじめた。にぎやかにはずんでいた会話も何となく途切れ勝ちで、思いなしか広場を行き交う人の数も少なくなったようである。広場をとりかこむようにして開いていた店も、気がついてみると、おもてに出ていた椅子や車を店の中へ入れたらしてほちほち仕舞いにかかっている。そのうち件の店も閉める時間になったとみえ例の女性がひとりで店じまいをはじめた。おもてのシャッターを

おろし、鏡をかけ、小さなハンドバッグを小わきに抱えて、もう何十年もそうしているかのような足取りで、すこし肩をすくめたうしろ姿をみせながら、やがてわれわれの視界から消えた。どこへ帰るのか。夫や子供の居る明るい居間へか、それとも年老いた親と暮しているアパートの一室へか。旅先でのふとした感傷がよぎつた。ほどなくわれわれの食事も終りになった。意外に安かつた勘定を払つて椅子をたつと、もう広場には人の影もまばらで、みまわすとおろしているのであつた。ホテルまでの短い距離を友と連れだつて歩きながら、「生きる」ということについてしきりに思いをめぐらせた。

### 天の声を聞く時

(講習所昭10卒) 柴田 恕平

松田先生の盛夏随想を拝読し、大変興味深く、感銘を受けました。

私は四十年前、当時花山天文台長であつた山本一清博士の講演を聞いた事を思い出しました。

山本先生は、人も知る、科学者であり、又キリスト者でしたのでその講演の内容には極めて、宗教

的なものがありました。山本先生は、科学の奥を究めると、益々、人間の力の小さい事を知るとともに、その神秘的な謎を解く事の困難さ、即ち一つの事が解けると次に又、新しい謎が現れてくる、という様に自分の微力さを知るものであると言はれていまし



た。

今でこそ、かけがえのない地球と言はれていますが、四十年前にその様な言葉は一般に聞く事はありませんでした。そんな時代に、地球こそ、人類家族にとってノアが箱舟に乗った様に、人類家族が地球という限られた箱舟に乗せられ、銀河系宇宙を浮游しているに等しい……と、

山本先生の言葉が、今も私の脳裡にこびりついていきます。

松田先生のお言葉の様に、此の宇宙は益々拡ってゆき、その距離は、現在の知る範囲では、五十億光年まで観測出来るそうですが、山本先生も当時、大宇宙を考えたとき、神の存在を信じなければ、人間の力では、到底、解明出来ない事柄が、拡ってゆく様に思うと言はれていました。

神は人間だけに考える力と、大宇宙を、自分の脳裡に画く能力、即ち想像力を与えてくれました。しかし、限りある人生の年月にどれだけ力が発揮出来るでしょう

か。  
アポロ十一号は、地球を離れ、月面に到達しました。しかし、大宇宙の中の極小範囲に過ぎません。太陽系の中の、地球の隣の庭先に飛び出したにすぎませんが、二十世紀の大事業でした。

そして、アームストロング船長は、月から地球を眺めたとき、あの地球には、三十六億に及ぶ人類家族が居る事を思い、やはり、神に対する畏敬の念を深くしたと報告されている記事を読みました。私も四十年前、洗礼を受けまして、今日迄幸に変わらない神への信仰を維持してきました。

思想統制の戦時中も遂に神は私を守って下さったと思っております。

社会的な信頼も、技術者としての自覚も、又、困難のドン底にある時も、私を支えたものは限りない、神への信仰と、聖書を読む事で力づけられました。

六十五才になった今日、余命を何らか社会のお役に立つて働く事によって、生き甲斐を見出したいと思っております。

さて、最近の映画で、「ノストラダムスの大予言」が大ヒットしています。

あの予言の中には、二十世紀の科学文明に、対する警告が言い現わされています。

過去の歴史は、人間が地上に築いた文化もその極点に達したとき反面、悪の華も大きく開き、滅亡した例は限りなくあります。

大予言が適中しない様に、子孫への遺産が輝かしいものであるためには、摂度、即ち、神の摂理を

知る人間の任務が、果されることよって、生きとし、生ける者が永遠に生存し得る可能性があると思えます。

私はキリスト者として、聖書の中の警句や予言が単に、古人の「たわ言」として受とることは出来ません。

現代にも当嵌める言葉を随所に発見いたします。

最後にその二ヶ所を抜粋いたしますと、

イザヤ書の中から、人はみな草だ、その麗しさは、野の花の様である。

主の息が吹けば草は枯れ、花はしほむ、されど、神の言葉はとこしえに変わることはない。

主は、初めであり、主は終りである。

主の栄光は、永遠である。主は万軍の主、或は創造主、と言います。人間が神の意によって生れ、死んでゆく、その神秘性を測り知る事は出来ません。

神の摂理、大自然の法則に従わねば、自ら破滅に導く事を教えています。

しかし又、主は我が牧者なり、我乏しき事非ず、主は我を緑の野に伏させ、

憩いの水際に伴い給う、我が杯は、溢るるなり、たとい、我、死の谷を歩む共禍を恐れず  
主我と共に在せばなり、  
ダビデの詩は、私たちに大きな勇気を与えてくれます、法然も、歎異抄に、  
一切を絶対なる者に帰依し奉

### 故 黒川武夫氏の逝去を悼む

法政大学教授 正木 知己  
昭和十二年卒



る、これ他力本願の要諦なり  
たとい念仏して、地獄に落ちたりとも  
悔ゆることなし、  
と、教えています。  
世紀末の現代に生きる目標をこの、東西二つの聖なる言葉が、ハッキリと言い当てていると思えます。

命の糸にあやつられてる事をしみじみと感じました。思い出せば四〇年前の昭和九年四月、教室で初めて机を並べて以来長い御付合でした。君は頗る真面目で、熱心で、几帳面で、頭脳明晰で、それを一生通し貫いて来られました。然も友達付合も大変よく、我々のクラス会の皆勤者でもありました。大学卒業後日本電気に入社、一貫して搬送通信関係の仕事に従事され、顕著なる功績を残され、又工学博士の学位を授与されました。その後、日本電気の各方面の仕事に関係され、どんどん出世されました。取締役、常務、専務と累進され、今後を大いに期待されて居ました矢先、君が急逝されました事は、御本人、御遺族はもと

十月十八日、朝、黒川氏急逝の報に接し、愕然と致しました。君は前日迄、頗る元気で十八日の我々の昭和十二年度卒業者一同の三十七周年記念のクラス会を、大変楽しみにして居られました。会場は日本電気の泉華荘で、一切の御手配を黒川さんが、おやりに成りました。  
当日は急遽故黒川武夫氏追悼会に変更し、一同で故人の霊をなぐさめました。確かに目に見えぬ運



より、会社も我々級友も痛恨おく  
あはざる所であります。情報化  
時代の花形として、頭悩で働き抜  
かれた黒川博士の霊の安からん事  
を御祈り申し上げます。

黒川武夫殿追悼クラス会(昭和  
十二年 三十七周年記念)

一、昭和四十九年十月十八日(金)  
五時~八時半

二、日本電気 泉華花にて  
三、井原、石崎、清野、清水、島  
津、田崎、高崎、中島、中野  
平田稔、正木、以上十二名

### 東京支部だより

六月一日、目黒八芳園において  
大谷先生、田中先生を迎えて、八  
十名の出席のもとに支部総会を開  
き、昭和四十八年度の行事報告を  
行った後、昭和四十九年度の行事  
計画及び予算を議決しました。参  
加されない方も多数おられますの  
で、東京支部の行事の概要を御紹  
介します。

#### 一、グループ活動

卒業年度の近い方々の懇談を主  
とした会で、現在昭和二十年卒業  
の方までグループ化が終ってお  
り、次いで昭和二十一年から昭和  
二十四年まで、昭和二十五年から  
昭和二十八年までの二グループの  
新設を計画しております。現在活

動している会名を御紹介します。  
鶴友会 明治、大正卒業生グル  
ープ

幹事 大西氏(大六) 滝本氏  
(大十四) 山本氏(大十五)

洛東会 昭和二年から昭和七年  
まで

幹事 真壁氏(昭五)

らつきよう会 昭和八年から昭  
和十一年まで

幹事 毎回持廻り  
洛楽会 昭和十二年から昭和十  
六年まで

幹事 相木氏(昭十五)

東友会 昭和十七年から昭和二  
十年まで

幹事 老田氏(昭二十)

デルタ会 講習所卒業の方  
幹事 小松原氏(講昭三)

二、趣味の会  
趣味を共にする方々の集いの会  
で、次のような会がありますので  
皆様の御参加を歓迎しております。

囲碁会 幹事 正木氏(昭十二)

将棋会 幹事 安達氏(昭四)

麻雀会 幹事 木村氏(昭十九)

謡曲会 幹事 吉岡氏(昭七)

ゴルフ会 幹事 山本氏(昭十六)  
木村氏(昭十六)

三、旅行会  
毎年一回バス旅行等を行って  
り、昭和四十八年度はみかん狩り  
を行い、箱根めぐりをしました。

本年は秩父めぐりを、来る十月二  
十七日に行う計画を進めておりま  
す。振って御参加下さい。

四、講読会、見学会  
年一度行っております。現在立  
案中です。

東京支部への連絡のとり方に  
いて

事務局 新丸ビル日立化成 古  
沢庶務課長

電話(〇三二二四一五二一)

幹事 日本ビル日立製作所電  
力技術本部細包(昭二十四)

電話(〇三二七〇一二二)

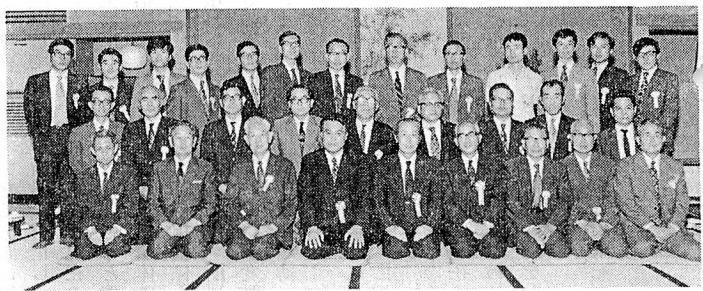
(細包記)

### 洛友会四国支部 総会報告

去る六月十五日(土) 高松市に  
て第十九回洛友会四国支部総会を  
開催した。

出席者は二十八名で会員の三十  
五%と例年通りの高出席率であ  
ったが、毎年高松市で開かれるた  
めか、出席者の顔ぶれがほぼ決つて  
いる感であった。

教室から大谷泰之、岡田隆夫両  
教授、本部から山本幹事の御出席



をいただき、最近の学校の様子な  
ど詳しく御紹介があった。

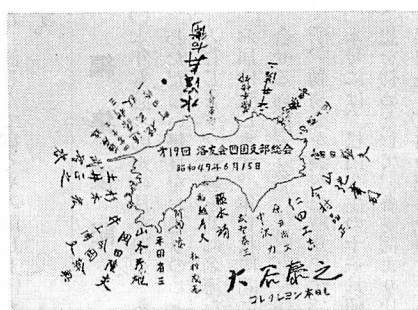
総会では阿部支部長の挨拶の後  
今回欠席された当支部最年長者安  
藤昌三氏(大正四年卒)、渡米中の  
渡部兼雄氏、佐々木英四郎氏らの  
近況が報告された外、四十八年度  
会務報告及び決算報告、四十九年  
度予算案審議がされ承認された。  
また役員改選があり、幹事の野中  
広氏が退任し、近藤耕三氏が選ば  
れた。

総会終了後は懇親会が開かれ先  
生を囲んで歓談し、しばし時を忘

### 中部支部 ゴルフ大会

支部総会の翌日七月二日、志  
摩カントリークラブに、大谷、上  
ノ園岡先生を迎え、十二名のゴル  
ファーが集った。七日島の日本電  
話施設(株)の道場での一夜を熟睡し  
た人、コンペの作戦を考えて寝つ  
かれなかった人、夫々に優勝をね  
らって意気軒昂でスタートをし  
た。

心配された天候も快晴に恵まれ  
文句のつけ様がない。当ゴルフ場  
は海岸沿いで、アウトコースはフ



れてのひとときであった。最後に  
は、先輩後輩が輪になり、肩を組  
んで学生時代をなつかしみ、三高  
寮歌、琵琶湖周航の歌を高らかに  
歌っておひらきとなった。

ラットなので比較的単調だが、一部狭い所も作ってある。すぐ横に太平洋の波の打返す白い砂浜があり、波乗や海水浴を楽しむ若者達が大勢いて、華やかであった。インコースは谷がえぐれ込み、白杭が沢山目につくホールが多く、又鴨越もかくやと思はれる様な崖の中腹から打下しの七〇ヤードのショートホール等かなり変化に富んでいる。バーは六八で簡単そうであるがメンタルなホールが多く正確さと運(?)を要求する難しいコースである。

成績

- 優勝 末田 和(昭19) 96 28 68
- 二位 内田 頼俊(昭37) 88 20 68
- 三位 上之園親佐(昭18) 94 25 69

- 外山 敏夫(昭22)
- 大谷 泰之(昭13)
- 遠藤 茂(昭27)
- 横川 京次(昭28)
- 田中 卓次(昭15)
- 川端 太郎(昭8)
- 西尾 又一(昭23)
- 松本 幸男(昭41)
- 石川 進(昭26)

以上(遠藤記)

電気工学講習所卒業生

諸兄への御相談

昭和五十年は大正四年生れの還暦の年に当ります。

電気工学講習所の第一回の卒業は大正四年である。この記念すべき年に当り、後続卒業生のない講習所大正四年から昭和十五年迄の卒業生は一つのクラス会と考えて一日ゆつくり語り合う機会を作ってほしいと云う申し出で、あちこちから湧いて来ました。

大正十五年四月に大阪市中之島公会堂を会場として開かれた同窓大会の記録(大正十五年八月二十五日発行会誌第拾号)を見ると、青柳先生の御土産「三美具」を頂戴して会場懇談室に入ると、在学中は白面の青年も今は鼻下に黒い一線どころか聯隊長然たるものもある。全く先生と段々年令丈けは接近して居る(但し頭の中の事はどうか判らんが)。此の会開けて僅か九回目で此の有様だ、二十年、三十年の将来、此の会合はどうだろう。今に「御家族御同伴云々」だの「孫に手を引かれて来た」など云う時もあると思うと何とも云い知れぬ興味が湧いて来る。何事も年と共に随分忘れて行くが忘れ得ぬのは同窓の顔だ、余り永く会はぬので顔と名字が一致せぬ、此処一寸言葉なく眼丈けパチクリさせているが無言裡に友情は迸っている。手紙も随分便利だが合つて話す様なデリケートな味はとて味はれぬ……と書いてあります。

それで京都以外の遠隔の友人を招くことを重点において京都市内に適当な旅館を探して京都市内或は近郊の諸兄も一所に泊つて一晩ゆつくり懐旧談にふけりたいと云う計画案を立てたいと思ひます。

来春、家族同伴でも孫に手を引かれてもよろしいが少し無理をしてでもあの青春の時代の昔を偲ぶ集りの企画に賛同される方は、どの位あるだろうかと話合つて居ります。

あなたの御意見やお気持を〒607京都市山科局私書箱五号 立石亨三宛御聞かせ下さい、それに依つて急ぎ具体的な計画を立てたいと思ひます。

電気工学講習所卒業生諸兄へ御相談申し上げます。

会員だより

前略ご免下さい。洛友会会員名簿の件で御意見申し上げます。

つね日頃この会員名簿を有効に利用しておりますが、各人の所属役職が約一年半まえのものが多くて実情にそぐわない点が多ございます。この点を正確にしておかねば、誤解を生じたり、不便を感じずる点も多々あります。事務局としては、正確を期するべく御努力をしていただいております。

なお一層の御調査(各人からいつてくるのをまつているのではなく積極的なアプローチを洛友会の方からかける)をおねがいたします。なお一案としては、各会社、団体毎に一名の名簿編集委員を選任して原稿の校正を期するようにさせてはいかげなものでしょうか、以上、意見まで

(阪口直史 昭四二電Ⅱ卒 大阪ガス勤務)

御指摘の点に就きましては、各社、団体内、有力なる先輩に御願ひして、最近の所属に訂正しましたので、次回の名簿は、現在の実情に近いものになって居ると確信致します。会員数の多い団体に就きましては、人事部の担当係を煩わし、訂正して居ります。所属等の異動は一年の間に、相当変動しますので、御指摘の様に名簿へん集委員の選任も必要ですが、会員各自からも御連絡を御願ひします。各クラス毎に編集委員を定めて頂くことも考えられますが、実行上に難点もありますので、現在は会社毎に事務局より適当と思われる会員又は、人事課に御面倒をおかけして居ります。

(幹事 山本記)

計報

講昭4	小野新一郎	49・7・30
講昭2	渡辺 満中	49・3
講大4	馬杉栄次郎	49・9・10
昭23卒	露口 早苗	
昭21卒	阪口 忠雄	49・8
昭9卒	武田 潔彦	49・8・21
昭8卒	小野 恒造	49・6・28
大7卒	森谷 一郎	49・8・18
昭20卒	小島 謙一	49・4・16
大6卒	中村 亮三	49・9・26
講昭12	吉桑 寿一	49・9・30
新制28	片山 敏夫	49・9・28
昭8卒	大塚 重遠	49・10・30
大4卒	牧 彬	49・7・13

以上の方々で御逝去になりました。謹んで御くやみ申し上げます。

編集後記

○本年も愈々師走の月を迎え、あわただしい毎日をお送りのことと存じます。会報と共に名簿をお届け致します。年賀状に間に合せる様出来るだけ最近の住所、勤務先を調べた積りです。

○本号には、松田先生の十一月随想を初めとして、各支部より比較的盛り沢山の記事を頂きました。執筆の方々には御礼申し上げますと共に、今後も会員の巾広い御投稿を御願ひします。ではよいお正月をお迎え下さい。

(幹事山本記)